

遠隔授業環境における英語科教育法模擬授業の実践と 効果の検証および今後の展望

The Micro Teaching Practice of the English Teaching Course
in a Distance Learning Environment and its Effectiveness and Future Prospects

榎本 洋子・辻 莊 一

Hiroko KASHIMOTO and Shoichi TSUJI

要 旨

2020年度の新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的大流行により、世界中の教員はその授業・教育方法の転換を迫られることとなった。本学の教育学部教職課程において指導する本研究者らも例外ではなかった。本実践研究では、研究者らが試行錯誤しつつ実践したICTを活用した遠隔授業の実際と、年度末に実施した学生へのアンケート調査結果を量的・質的に分析・検証した結果を示す。通常、授業はコミュニケーションを基本としているため、対面で行われることが望ましい。また教職課程においては模擬授業が重要な要素であり、オンラインでの実施は望ましい形ではない。そこで研究者らはまず模擬授業を含む授業の全内容を精査し、到達目標の達成のために、対面で行うべきものとオンラインで代替えすることのできるものの2つに大別した。すなわち、ICTを活用した反転授業・アクティブラーニングを効果的に取り入れた最良の英語の授業方法を指向した。その結果、教職課程の学生達がオンデマンドやオンラインの遠隔授業ではなく、対面での模擬授業を望ましいと考えていることが実証された。さらに、ポストコロナ時代に向けて、「ICTを活用した望ましい遠隔授業の展望」について述べる。

キーワード：ICT活用、模擬授業、反転授業、アクティブラーニング

1. はじめに

2019年12月、最初に中国湖北省武漢で発生が報告されたCOVID-19（通称：新型コロナウイルス）の蔓延により、2020年度世界中が大きな影響を受け、以降の教育現場においては、それまで当たり前だった対面での授業を実施できなくなり、全国の大学は、一斉にオンライン授業の実施を迫られることとなった。本学においても、夏学期は全面オンラインで授業を実施することとなり、教員・学生ともに未曾有の状況下で新学期をスタートすることになった。

オンラインでの授業の実施にあたり、まず課題となったのは、学生・教員両者のICT（Information and Communication Technology）環境およびICTスキルの不足である。当初は学生のパーソナルコンピューター（以下PC）の所持率や通信環境が十分ではなく、学内の設備や通信環境の整備といったハード面の問題がまず大きな課題であった。本学においても、学生の現状把握から教員のFaculty Development（FD）研修、PCやWi-Fi機器の貸し出し等、様々な

支援策がとられた。しかし ICT 環境やスキルについては、個人差が大きいことが課題として残った。また夏学期においては、使用するプラットフォームが教員によって違い、結果として学生により、多くの混乱を招くこともあった。

もう一方で、教員はそれまでの授業・教育方法の転換を迫られることになった。環境面での混乱の解消とともに、学生の学修の質を保ち、学生の意欲・学びを止めない授業の実施が必要となる。本研究者は、まず自身の担当する授業内容を精査し、対面で行うべき（対面でしかできない）授業内容と、遠隔環境においても反転授業を取り入れることで代替できる内容の切り分けを行った。そこで大きな課題として浮かびあがったのが、模擬授業の実施方法である。

本研究者は、教育学部で（小）中等高等学校の英語教員を目指す学生の教職課程において「中等英語科教育法」を担当している。他の英語の授業と大きく違い、「教育法」の授業では、模擬授業の実施が欠かせない。実際の教育現場は対面で行われることが原則であるとともに、語学の授業はコミュニケーションを基本としている。従って、模擬授業は本来児童・生徒役の学生の反応をみつつ、やり取りをしながら行われるべきである。そのため当初から「遠隔・オンライン環境で、いかに効果的に模擬授業を行うか」に苦慮し、試行錯誤を行った。本稿では、夏・冬学期に行った授業の報告、および年度末に実施した学生へのアンケート調査結果の量的・質的分析結果を検証し、さらに次年度以降に向けて、反転授業・アクティブラーニングを効果的に取り入れた授業方法の確立に向けての展望を述べる。

2. 研究背景

文部科学省は、2013年4月8日に「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」を公開した。この中で、「グローバル人材育成のための3本の矢」として、

- ① 英語教育の抜本的改革
- ② イノベーションを生む理数教育の刷新
- ③ 国家戦略としての ICT 教育

をあげている。

また2016年には、内閣府が『第5期科学技術改革計画』において、我が国が目指すべき未来社会の姿として、初めて「Society 5.0」を提唱したことをうけ、文部科学省は「GIGA スクール構想」すなわち、義務教育を受ける児童・生徒のために、1人1台の学習者用 PC と高速ネットワーク環境などを整備する5年間の計画を推進し、2023年の完了を目指していた。こうした動きの中で、小・中・高等学校において学習指導要領が改訂され、ICT活用による学校情報化が進み、当然大学教育においても、ICT教育を活用した新しい教育方法が模索されていた。

COVID-19の蔓延により、各自治体はこのGIGAスクール構想を前倒して2021年度中に完了することとなり、各大学においては「学生の学びを止めない」ための試みが様々に行われた。

本学においても、夏学期は全面オンラインで授業を実施することが決定され、学内のハード面でのICT化が急速に促進されることになったが、一方で、教員・学生ともに、ICTスキルの不足により、2020年度夏学期は大きな混乱があった。

本研究者も、夏学期開講前の数週間に、自身のハード面・ソフト面両面からICTスキルの向

上に努めるとともに、シラバスの大幅な変更を余儀なくされた。まず自身の担当する授業内容を精査し、対面で行うべき（対面でしかできない）授業内容と、遠隔・反転授業で代替できる内容の切り分けを行った。すなわち、一方向的な講義内容については講義を録画し、ウェブ上で配信（オンデマンド型）し、双方向オンラインでの授業では、対面でしかできない・すべき内容を行う【反転授業】形式を取り入れることとした。

3. 反転授業

「反転授業」とは、

“While there is no one model, the core idea is to flip the common instructions approach: With teacher-created videos and interactive lessons, instruction that used to occur in class is now accessed at home, in advance of class. Class becomes the place to work through problems, advance concepts, and engage in collaborative learning. Most importantly, all aspects of instruction can be rethought to best maximize the scarcest learning resource—time.”

(Tucker, B, 2012)

とあるように、従来対面で行われていた講義の部分を教員がビデオ作成し、学生はそれを視聴した上で、課題等に取り組む。教員は提出された課題に対しコメント等を返す事により、教室の外でインタラクティブなやりとりを行う授業方式である。

学生らは、従来対面で行われていた「講義」を、YouTubeや教育向け動画ツール Flipgrid 上にアップロードされた教員自作のビデオ映像や既存の Web 教材を予習の形で受講した後、Zoom や Teams 等の TV 会議システムを通じて、オンラインで演習や学習内容に関わる意見交換などを行う。

このサイクルが円滑に循環することで、真の意味で【反転授業】が行われた事になる。そして、オンラインでの遠隔授業と従来型の対面授業を組み合わせることで「ブレンディッド型」教育モデルとなる。

ここで大切なことは、ICT を活用しての授業を行う際に、「IT ではなく ICT、これは、コンピュータよりも人、情報技術よりも伝達能力ということを意味する。ICT とは、従来の IT の意味するコンピュータ技術に加えて、それを使ったコミュニケーションを強調した表現だと捉えられる。」(吉田, 2014) とあるように、教育の場では、教員と学生、また学生同士のコミュニケーションを基本とした授業実践でなければならない。また吉田は、「徐々に教育環境の整備も進み、対面式の授業と e-Learning を組み合わせたブレンディッド・ラーニングも主流となっている。ところが、ICT の整備に伴い、外国語教育の理論と教育現場との間には、いまだに大きな溝があり、従来の授業との整合性をとり、実際にどのような手順や方法で、ICT 授業を運営すればよいのか、また、実際に運営を試みてみたが思うような成果が得られない、といった報告も多い。」(p.4) と早くから述べている。この視点を元に、中等英語科教育法では、さらに自律学習としての英語力養成を加えた「ブレンディッド型」授業モデル (図 1) を指向した。

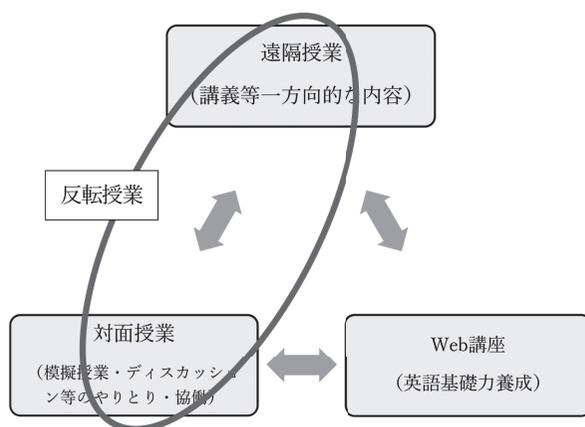


図1：ブレンディッド型授業モデル

4. 研究の実際

4-1. 研究対象

研究者らが担当する「中等英語科教育法」2クラスの2,3年生（小学校教育コースおよび中高英語教育コース）72名を対象として実践研究を行った。

夏学期：中等英語科教育法Ⅰ（小学校教育コース）・中等英語科教育法Ⅲ（中高英語教育コース）

冬学期：中等英語科教育法Ⅱ（小学校教育コース）・中等英語科教育法Ⅳ（中高英語教育コース）

4-2. 研究目的

上述したように、COVID-19の感染拡大により、本学では令和2年度の授業において遠隔・オンラインでの授業実施を余儀なくされた。この状況下で、これまで行われてきた対面授業と同等の「学生の学びの質」を確保できているかが問われている中、本学においても遠隔授業の効果を検証し、充実させていくことが求められている。

研究者らは、本学において担当する「教育実習指導」や「中等英語科教育法」で、令和2年度夏学期に、同期型・非同期型の遠隔授業を学生のインターネット環境等の状況を見守りつつ、慎重に実施してきた。授業には、近年注目されている【反転授業】を取り入れつつ、本科目で求められる模擬授業について、一部対面授業も行って、遠隔授業と対面授業を併用する「ハイブリッド方式」の授業を行った。この実践を踏まえ、研究者が試行錯誤しながら見出した授業方法を検証し、ポストコロナ時代においても活用・実施可能な、教員・学生両者にとって効率のよい新しい教育方法を確立したい。

当初は3か年計画（表1）を立て、研究を開始し、学内共同研究助成に応募した。しかし、

表 1. 研究計画（申請時）

		研 究 計 画
1 年目	2020 (R2) 年度	夏学期・冬学期において、オンライン・ハイブリッド型での効果的な授業方法を検証し、特に模擬授業について学生へのアンケートを実施し、結果を分析・考察する。
2 年目	2021 (R3) 年度	令和 2 年度の実践結果の分析結果をもとに、夏学期では修正案に基づいて実践するとともに、評価方法のプロト案の作成・試行、分析を行う。
3 年目	2022 (R4) 年度	令和 2 年度・令和 3 年度の実践結果の比較検証を行い、評価方法を含む遠隔授業の効果的な実践方法の確立をめざす。

審査の結果、単一年の共同研究として採択された。そのため、初年度の研究計画を元に、2020 年度（第 1 年目）の研究目的を、

- 1) 遠隔授業環境下での模擬授業実践に関する学生へのアンケート結果を分析・検証し、より効果的な模擬授業実践の考察を行う。
- 2) 次年度へ向けて反転授業を効果的に取り入れた中等英語科教育法の授業方法を確立する。とした。

4-3. 研究計画

本研究は、学内共同研究助成に 3 年の長期計画で応募し、内外の研究を参考にしながら、四天王寺大学教育学部の英語教育における「遠隔授業を取り入れた新しい最適な教育方法」を確立することを目的としてスタートした。表 1 は申請時の研究計画である。

4-4. 研究の実際

夏学期においては当初対面授業が許されず、基本的には大学 LMS: Learning Management System (IBU.net) や Google Classroom をプラットフォームとして、オンデマンド配信を基本としたオンラインで授業を行った。当時、全学で各教員が多種多様なプラットフォームを使用しており、それらの操作に不慣れな学生にとっては相当な負担であり、またすべての授業を PC 前で受講し続けることは、大きな負担になっていることが次第に判明する。学生は、毎日長時間、録画配信を何本も視聴して、それに対する課題を提出することを要求されることになり、それは時間的にも難しいことがすぐに明らかになった。

そこで、これまで学生を目の前にして行っていた講義をそのまま録画で配信するのではなく、講義内容を厳選し、10 分程度（長くとも 15 分まで）に凝縮した録画ビデオを作成・選択するようになった。また学生の自主的な学びを促すような仕掛けを用意することが必要であるため、毎回の授業ビデオの作成以外にも、普段の対面時の数倍の時間と労力をかけて授業準備を行った。

様々な課題を抱えつつ、少しずつ授業内容を改善しながら夏学期を進めたが、後半に控えていた「模擬授業」の実施方法が大きな課題として浮かび上がった。「教育法」の授業においては必須といえる「模擬授業」の実施をどう実現するか、に苦慮した末、夏学期後半には、模擬授業を担当する少人数の学生のグループの登学が可能となったので、学生が模擬授業動画を大学

内で撮影してオンラインで配信することとした。授業者の学生は、教員の前で模擬授業を実施しつつ、教育動画ツール「Flipgrid」を活用し、その場でスマートフォンを使用して録画した動画をウェブ上にあげる。他の学生はその動画を視聴して Google Forms あるいは Microsoft Forms で作成した相互評価フォームに記入をする。教員は学生のフォームの入力結果をまとめて授業者に送る、という形でフィードバックを行った。しかし、ICT 環境が未だ十分に整っていなかったり、ICT スキルが不十分だったりしていた学生にとっては、大きなストレスとなっていたことがわかった。

冬学期になると、分散登校での対面授業ができるようになったので、前半はハイフレックス / ハイブリッドと呼ばれる形式で授業を展開した。すなわち、クラスの半数が登学で対面授業を受け、残りの半数はオンライン TV 会議システム（Zoom/Teams）を利用した双方向リアルタイム配信で受講した。しかしこの方式は、対面で参加する学生にどうしても焦点があたりがちであり、音声や映像だけでは教室全体の様子がオンラインの学生には伝わりにくいといった難しさもあった。冬学期の模擬授業については、オンライン参加の場合は、授業の様子と板書やスライドを両立して配信するための環境的・技術的な困難が残る中での実施であった。12月には COVID-19 の第三波により、再度の「緊急事態宣言」が発令され、模擬授業の形式も変更せざるを得なくなった。

そこで、中等英語科教育法Ⅱでは、学生と相談の結果、残りのグループは TV 会議システムでグループごとに行った模擬授業を録画した動画を Google Classroom にアップロードし、相互評価フォームに記入をすることとした。一方、教育法Ⅳでは全員が TV 会議システム上で模擬授業を行いリアルタイム配信することとなった。

授業の過程において、オンデマンド教材に文部科学省が作成した優れた教員のモデル授業や次々に発表される ICT 関連・評価についての最新情報の動画等を利用したり、Google/Microsoft Forms を使用して、模擬授業の際にウェブ上で相互評価を行ったりした。またディスカッションの際には、ホワイトボードの代わりとなる Jam board 等を使って、オンラインの学生と対面の学生をつないだりしたが、こうした教育アプリケーションソフトや動画の活用は、対面授業の代替という以上の効果があると考えられるので、COVID-19 収束後にも継続すべきだと考える。

紆余曲折・試行錯誤を繰り返して授業を行った 2020 年度の中等英語科教育法Ⅱ・Ⅳであったが、最終時に受講学生に対し Google Forms 上でアンケート調査を実施した。

設問内容は以下の通りである。

設問 1：自宅等で遠隔授業を受ける環境（PC、Wi-Fi 等）

設問 2：自分自身の ICT スキルに対する自信について

設問 3：遠隔授業についてのストレスについて

の 3 つは、それぞれ 5 件法で訊ね、

設問 4：夏学期の模擬授業で、自分が【行った】模擬授業の形式について

設問 5：夏学期の模擬授業で、自分が【観た】模擬授業の形式について

設問 6：冬学期の模擬授業で、自分が【行った】模擬授業の形式について

設問7：冬学期の模擬授業で、自分が【観た】模擬授業の形式については、それぞれ、オンライン・オンデマンド（録画）/ オンライン双方向 / 対面 から回答を選択した上で、設問8において、模擬授業を自分が【行う】際に、一番【好ましい】形式と【好ましくない】形式について上記3つから選択し、設問9において【好ましい】形式の理由、設問10で【好ましくない】理由についての自由記述をした。次に、設問11～13では、自分が【観る】際について同様の選択と理由の自由記述を行った。最後に設問14で、現段階での卒業後の進路希望を訊いた。

4-5. 研究結果と考察

4-5-1. 量的分析結果

設問1～3は、学生のICT環境、ICTスキルへの自信および遠隔授業に対するストレスの相互の関連・影響を考察するための設問である。設問1において、ICT環境が「十分整っている / 整っている」と答えた学生は、中等英語科教育法Ⅱでは88.3%、Ⅳでは84.5%であった。

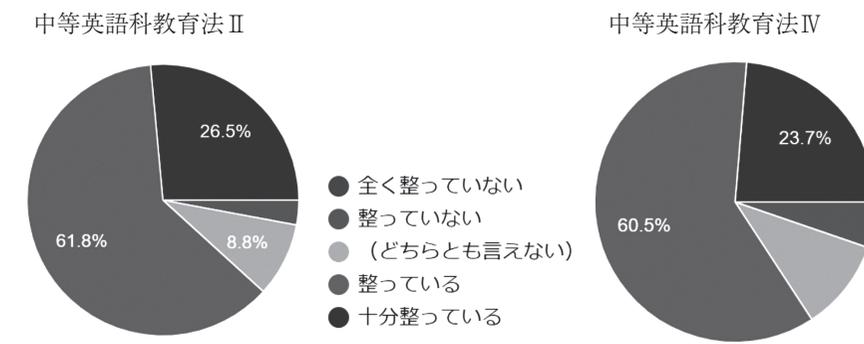


図2：設問1：自宅等で遠隔授業を受ける環境（PC, Wi-Fi等）

設問2のICTスキルについての自信が「ない・全くない」と答えた学生は、両方のクラスとも約25%、普通と答えた学生は62～3%、あると答えた学生は1割強となった。

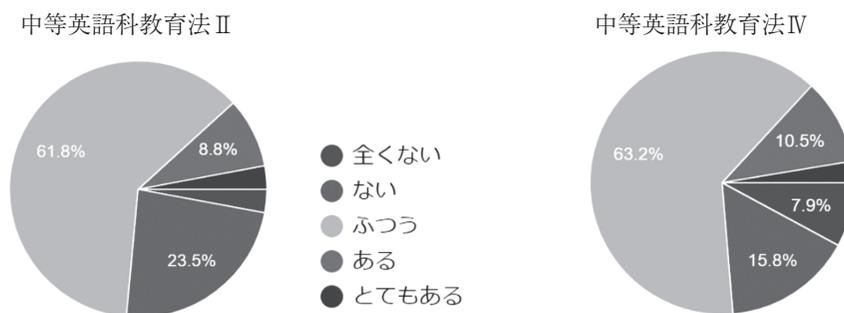


図3：設問2：自分自身のICTスキルに対する自信について

設問3の遠隔授業に対するストレスについて、「ある・とてもある」が、IIでは53%、IVでは76.3%、「普通」が、IIが23.5%、IVが15.8%、となっている。「ない・全くない」と答えた学生は、IIが23.5%、IVは15.8%であった。

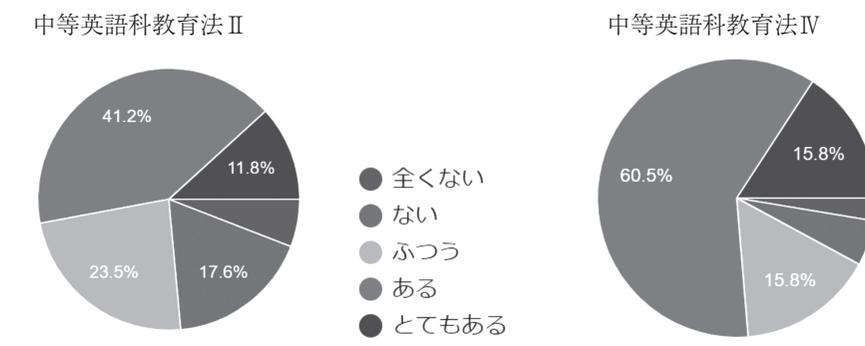


図4：設問3：遠隔授業についてのストレスについて

設問1～3について、langtest (<http://langtest.jp/>) を用いて、繰り返しなしの t 検定を行ったところ、 p 値はすべて $p > .05$ で、2つのクラスで環境的な有意差は確認されなかった。

ただし、ピアソン相関分析を行うと、効果量 (r) は、中等英語科教育法IVで、設問1～設問2において $r = 0.62$ となっており、ICT環境とICTスキルへの自信に、中程度の相関があることがわかった。(表2)

表2：ピアソン相関分析結果

中等英語科教育法II				中等英語科教育法IV			
	1	2	3		1	2	3
設問1	—			設問1	—		
設問2	.19	—		設問2	.62*	—	
設問3	.08	.14	—	設問3	.08	.04	—

4-5-2. 質的分析結果

設問4～8は、遠隔授業環境での模擬授業に関する学生の情意面での調査である。

設問8の「自分が【行う】際に【好ましい形式】と【好ましくない形式】についての2つのクラスの選択結果は、図5の通りであった。

【好ましい形式】では、圧倒的に「対面」を支持する意見が多い。【好ましい】と答えた理由の自由記述には、

- ・対面で、児童・生徒役の学生の反応を直に感じたいから。
- ・(対面は) その場で、フィードバックを得られる。
- ・対面ですること実際の緊張感が味わえるから。

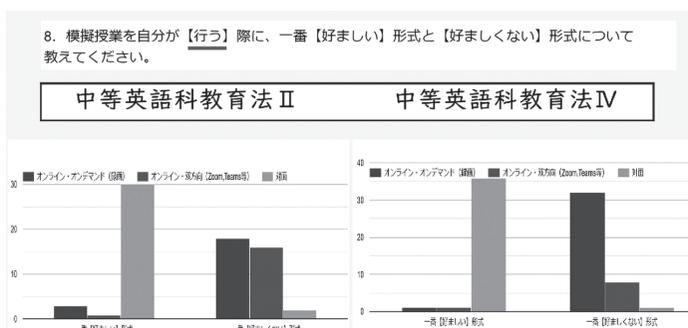


図5：設問8 アンケート結果

といった記述が多い。

また一方で、「対面」以外を選んだ学生は、

- ・コロナ禍においては、Zoomなどで双方向で行うことで若干の臨場感は得られる（が、通信環境に左右される）。
- ・自分の模擬授業を振り返ることができるから。
- ・録画をすると、臨場感はないが、繰り返し見ることができる。

といった、双方向オンラインや録画の利点を挙げる学生も見られた。

ここから、学生の多くは自分が「行う」場合も「観る」場合も、模擬授業は対面での実施が最適であり、できるだけ対面で行いたいと考えていることが読みとれる。

さらに KHCoder3 (<https://kncoder.net/>) で質的分析を行ってみると、頻出語に、中等英語科教育法Ⅱ（冬学期に録画で模擬授業を実施したクラス）では「感染」、全て双方向リアルタイムで行ったⅣのクラスでは「トラブル」といった特徴的な単語が上位に出現していた。（図6）

中等英語科教育法Ⅱのクラスでは、COVID-19の感染状況により、模擬授業をハイブリッド方式（対面＋双方向オンライン）か録画のどちらかで行った。模擬授業を録画した学生の中には、ICTスキルに自信がなくても、時間をかけて納得のできる模擬授業動画を作成することができたため、ICT環境にあまり左右されなかったと感じ、コロナ禍の状況でのICT活用をプラスに捉えていたことを示唆する。一方、全員双方向のオンラインで模擬授業をすることになった中等英語科教育法Ⅳのクラスでは、ICTスキルの不足により、模擬授業そのものに集中できず、逆に環境によるマイナス面を感じる学生がいたことを示唆している。これは、先の相関分析で、学生のICT環境とICTスキルに関する自信において中程度の相関がみられたことを裏付ける。

中等英語科教育法Ⅱ

List			
#	抽出語	品詞/活用	頻度
1	実際	副詞	12
2	授業	サ変名詞	12
3	人	名詞C	9
4	対面	未詳 サ変名詞	5
5	緊張	サ変名詞	5
6	生徒	名詞	5
7	反応	サ変名詞	5
8	見る	動詞	4
9	思う	動詞	4
10	自分	名詞	4
11	場	名詞C	4
12	リアクション	名詞	3
13	感染	サ変名詞	3
14	行う	動詞	3
15	前	副詞可能	3

中等英語科教育法Ⅳ

List			
#	抽出語	品詞/活用	頻度
1	反応	サ変名詞	16
2	生徒	名詞	13
3	授業	サ変名詞	12
4	対面	サ変名詞	8
5	実際	副詞	6
6	場	名詞C	6
7	見る	動詞	5
8	児童	名詞	4
9	自分	名詞	4
10	構築	サ変名詞	4
11	トラブル	名詞	3
12	近い	形容詞	3
13	空気	名詞	3
14	形	名詞C	3
15	人	名詞C	3

図6：設問9「行う」際に好ましい形態についての理由 頻出語

以上のことから、模擬授業を実施する際には、以下の配慮・準備が重要であると考えられる。

- 1) 学生のICT環境の整備：必要十分な通信環境とPC所持を基本とした環境整備および授業で利用するプラットフォームの使用に習熟するよう、事前のインストラクションを十分に行う。
- 2) 模擬授業に学生が期待することは、対面に近い臨場感である。したがって、オンライン双方向で行う際には、生徒役の学生からのリアクションを感じられるようにする工夫（例えば、Zoomの反応ボタンの活用等）や、教員・クラスメイトからの即時フィードバックの時間を確保する。さらに模擬授業についての改善案についてのディスカッションを行うことが望ましい。
- 3) 同時に、繰り返し再生し視聴できる、という録画の利点を活かし、学生の省察を促進するための仕掛けと、録画を受容するクラスの雰囲気作りを授業開始時から培う。

5. 課題と展望

ここからは、2020年度の実践研究により、新たに見えてきた課題と今後の実践・研究の展望について述べる。

1年目の実践研究では、一方向的な講義形式の内容は、学生が「個」で取り組めるものである。「オンデマンド（非同期型）」で行い、「リアルタイム双方向（同期型）・対面授業」では、ディスカッションや模擬授業など、やりとりや協働を中心に行う反転授業を効果的に取り入れたブレンディッド型授業モデル（図1）が効果的であることは間違いなかった。

反転授業の効果について、小川（2015）は、

- ①インプット型からアウトプット型への学びの転換
- ②学生同士の相乗的な学習の動機づけの誘発
- ③学生の学習行動の見える化の推進
- ④クラス内での協働意識やクラスへの帰属意識の向上と教員に対する親近感の向上
- ⑤時間外学習時間の増加

⑥全体的な学力の確実な向上と学生間の学力差の解消

⑦時間の有効活用

の7点を挙げている。

しかし実際には、これらの効果を十分に得ることはできていない。①で示される「アウトプット型への学びの転換」は、より学生の自主的な授業への参加を必要とする。それには、まず②の「学生同士の相乗的な学習の動機付け」を促進するような仕掛けも必要であろう。

杉江(2011)は、協同/協働(Cooperative Learning)について、「主体的で自律的な学びの構え、確かに幅広い知識習得、仲間と共に課題解決に向かうことのできる対人技能、さらには、他者を尊重する民主的な態度、といった「学力」を効果的に身につけていくための「基本的な考え方」を言うのです。」(p.1)と述べている。今後はさらに協同/協働学習等のアクティブラーニングの手法を取り入れ、学生の学び合いの機会を増やしたい。それには、教員のファシリテーションスキルも伸ばしていくことが必要であろう。

また、オンラインで模擬授業を実施する際には、より対面に近い状況を生み出すための方策を見出したい。例えば双方向で行う際には、集音マイクを導入して教室内の声がオンライン参加の学生にもクリアに届くようにするなどのハード面の改善を試みたり、録画をする場合も、夏学期に行ったように、小人数で集まって録画ができるような時間・スペースを確保・提供したりするなどの工夫をしたい。さらにディスカッション等の機会を増やし、学生の相互交流や省察のためのルーブリックを学生とともに作成するなど、「学びへの方向付け」を行う。

また、⑤「時間外学習時間の増加」や⑦「時間の有効活用」などは、教員のコントロールが難しく、学生自身の「自律の学びの姿勢」の育成が肝要である。そのための一つの方策として、学生が、オンデマンドビデオの利点として「自分のペースで見ることができる」と記述していたことを踏まえて、視聴のためのペース作りの例を示すことや、意欲のある学生には、さらに学びを深めることができるように第2言語習得理論や教育学に関する解説ビデオを配布して、その理論や知見と学生自身の模擬授業との関係を意識化させるような課題を与えること等が考えられる。

また、Google Classroomなどの教育プラットフォームをさらに有効活用して、③「学生の学習行動の見える化の推進」をし、授業外での自律的な学習を促進しつつ、学生の動機づけの一助となるような評価指標の作成をし、学生の省察を促すようにしたい。④の「クラス内での協働意識やクラスへの帰属意識の向上と教員に対する親近感の向上」は、オンライン・遠隔環境だけでは難しい側面もあるが、ハイブリッド方式の授業をより充実させることで、従来の対面授業と同等の効果をめざしたい。⑥「全体的な学力の確実な向上と学生間の学力差の解消」は、「学び合い」「協働学習」を効果的に取り入れることで可能となると考える。

今後は、オンライン双方向(interactive remote)での授業の強み(例えば、通学時間の節約や対面での授業に対する学生の心理的障壁の軽減)を活かしつつ、弱点(ICT環境・技術の多寡による影響等)を克服する方策を検証し、よりよい授業デザインを目指し、最終的に本学の英語教育全体に資する研究としていきたい。

6. おわりに

2021年3月現在、COVID-19は未だ収まる気配がなく、新年度においても当分はハイブリッド式の授業形態が続くことが予測される。遠隔・オンライン環境下においては、学生及び教師双方のICT活用力の向上が、教育の質・公平性・効果に大きく影響することは間違いなさであろう。ポストコロナ時代には、ICT活用の需要がさらに高まり、今後AI時代へと進んでいくことは必須であり、各教育機関においてもICT教育のさらなる尽力・発展が求められる。

ただし、教員がICT活用力に長けている場合は、とかくICT活用に不慣れな学生が置き去りにされがちになることが懸念される。教員が求めるICT活用についていけない学生が取りこぼされない配慮を忘れてはならない。また教員は学生の現状や能力を理解し、寄り添いつつ、コロナ禍で得た知見を活かして、授業形態そのものを、従来のものと大きく変容させていくべきであろう。

ジョン・デューイが“If we teach today’s students as we taught yesterday’s, we rob them of tomorrow.”と言っているように、教員は変革を恐れず、常に新しい価値を追求していかねばならない。そして、これまでのように知識・技能を伝達するだけでなく、安永（2009）の言う「学生たちに自らの知識を積極的に構成させるように「ファシリテーター」として「学習環境を調整して自律学習を奨励する人」となることが求められるであろう。

2020年度の1年目の実践・研究は、3年研究計画の準備期間であったと言える。今年度の成果を活かし、今後は内外の研究を参考にしながら実践を継続し、その結果の比較検証を行い、評価方法を含む、四天王寺大学教育学部の英語教育における「遠隔授業を取り入れた新しい最適な教育方法」の確立を目指す。

謝辞

本実践研究は、四天王寺大学「令和2年度共同研究助成」を受けて実施したものです。改めて、ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 江利川春雄 編著（2012）.『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』東京：大修館書店。
- エリザベス＝バークレイ 他, 安永悟 監訳（2009）.『協同学習の技法 大学教育の手引き』京都：ナカニシヤ出版。
- 小川 勤（2015）.「反転授業の有効性と課題に関する研究：大学における反転授業の可能性と課題」,『大学教育』12巻, 山口大学機構。
- 杉江修治（2011）.『協同学習入門：基本の理解と51の工夫』京都：ナカニシヤ出版。
- 竹内 理・水本 篤（編）（2014）.『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために（改訂版）』松柏社。
- 内閣府（2016）.『第5期科学技術改革計画』 Retrieved from <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index5.html>（2021年3月5日参照）

- 馬場崎賢太・増田由香（2016）。「大学英语における反転授業の導入と学習効果」『広島修道大学論集』第57巻，第1号。
- 樋口耕一（2019）*KH coder 3 Alpha.17b*. (Computer software) Retrieved from <https://kncoder.net/> (2021年3月16日参照)
- 文部科学省（2013）。「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」Retrieved from <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/dai6/siryou5.pdf> (2021年3月5日参照)
- 吉田晴世，野澤和典 編著（2014）.『最新ICTを活用した私の外国語授業』東京：丸善プラネット。
- Arnold-Garza, S. (2014). The Flipped Classroom Teaching Model and Its Use for Information Literacy Instruction. *Communications in Information Literacy*, 8, 7-22.
- Bergmann, J., Sams, A. (2012). Flip Your Classroom; Reach Every Student in Every Class Every Day. *International Society for Technology in Education*.
- Mizumoto, A. (n.d.) langtest (Computer software) Retrieved from <http://langtest.jp/#app> (2021年3月16日参照)
- Tucker, B. (2012). The flipped classroom. *Education Next*, 12(1), 82. Retrieved from http://www.msuedtechsand box.com/MAETELY2-2015/wp-content/uploads/2015/07/the_flipped_classroom_article_2.pdf (2021年3月14日参照)

The Micro Teaching Practice of the English Teaching Course in a Distance Learning Environment and its Effectiveness and Future Prospects

Hiroko KASHIMOTO and Shoichi TSUJI

Abstract

With the pandemic of COVID-19(new coronavirus disease) in 2020, teachers throughout the world had to make a fundamental shift in their teaching. The researchers, who teach the teacher training course at IBU in Japan, also had to adapt to the situation. This study shows how the researchers conducted the classes through a trial-and-error process and the results of the practice using the questionnaires through qualitative and quantitative statistics.

The teacher training course students are expected to be able to teach face-to-face English classes to which “communication” is essential. In the course, microteaching, normally conducted face-to-face, plays an important role. Naturally, carrying out the microteaching through online is not desirable. The researchers scrutinized their course contents including microteaching, and sorted them out into two categories, what should be done face-to-face and what can be done online to achieve the best outcome possible. In other words, the researchers sought the best way to conduct flipped classrooms in a teacher training course using ICT.

It substantiated the students of teaching course prefer face-to-face microteaching than the on-demand or on-line remote sessions. Furthermore, it shows some advantages of teaching a English teaching course in a distance learning environment and prospects for the post corona era.

Keywords: ICT, Distance teaching, Microteaching, Flipped classroom, Active learning